

平安京右京八条二坊十・十五町跡、
衣田町遺跡

平安京右京八条二坊十・十五町跡、
衣田町遺跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京八条二坊十・十五町跡、
衣田町遺跡

2008 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、共同住宅建設にともなう平安京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

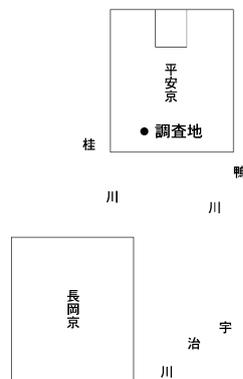
平成 20 年 11 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京八条二坊十・十五町跡、衣田町遺跡
- 2 調査所在地 京都市下京区七条御所ノ内北町 63 - 1
- 3 委 託 者 株式会社日商エステム 代表取締役 山下賢次朗
- 4 調査期間 2008年8月18日～2008年9月12日
- 5 調査面積 289 m²
- 6 調査担当者 平田 泰
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「西京極」「中河原」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 平田 泰
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4K

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査の経過	1
(2) 位置と環境	2
(3) 周辺の調査	3
2. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 検出遺構	7
3. 遺 物	11
(1) 遺物の概要	11
(2) 出土遺物	11
4. ま と め	17

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 全景（北から）
		2 建物（北から）
図版 2	遺構	1 柱穴 15（西から）
		2 建物：柱穴 16（西から）
		3 建物：柱穴 17（西から）
		4 建物：柱穴 20（西から）
図版 3	遺物	1 弥生土器
		2 溝 13 出土土器 1
図版 4	遺物	1 溝 13 出土土器 2
		2 溝 8 出土土器
図版 5	遺物	墨書土器・錢貨・紡錘車・柱根

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	四行八門地割による調査区位置図（1：1,500）	2
図3	調査区配置図（1：500）	3
図4	調査前全景（北から）	4
図5	作業風景（北東から）	4
図6	周辺調査位置図（1：5,000）	5
図7	基本層序図（1：50）	7
図8	遺構平面図（1：150）	8
図9	建物実測図（1：100）	9
図10	溝8・9・13断面図（1：50）	10
図11	弥生土器実測図（1：4）	12
図12	溝13出土遺物実測図1（1：4）	12
図13	溝13出土遺物実測図2（1：4、1：1）	13
図14	溝8出土遺物実測図（1：4）	14
図15	暗灰黄色砂泥層・その他の出土遺物実測図（1：4）	15
図16	柱根実測図（1：8）	16

表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	遺物概要表	11
表3	掲載遺物一覧表	18

平安京右京八条二坊十・十五町跡、衣田町遺跡

1. 調査経過

(1) 調査の経過

調査地は、京都市下京区七条御所ノ内北町 63 - 1 に所在する。この敷地で共同住宅の建設が計画された。当該地は平安京右京八条二坊十・十五町跡、野寺小路跡に比定され、衣田町遺跡の範囲に入っている。

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課による試掘調査では、溝状遺構、路面状遺構が検出され、それぞれ野寺小路の側溝、路面の可能性を指摘、発掘調査による精細な調査の必要が指導され、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に発掘調査が委託される運びとなった。

発掘調査は 2008 年 8 月 18 日から機材の設定、器材の搬入を行い、翌 19 日から機械掘削、21 日には遺構検出作業に入った。25 日には野寺小路の東西側溝と路面、十町内で建物跡などを検出、精査掘込作業を行い、9 月 2 日には全景写真の撮影、図面類の作成を行った。5 日には地元向けに現地見学会を開いて検出遺構の概要を公開した。8 日からは下層状況の確認のために断ち割り

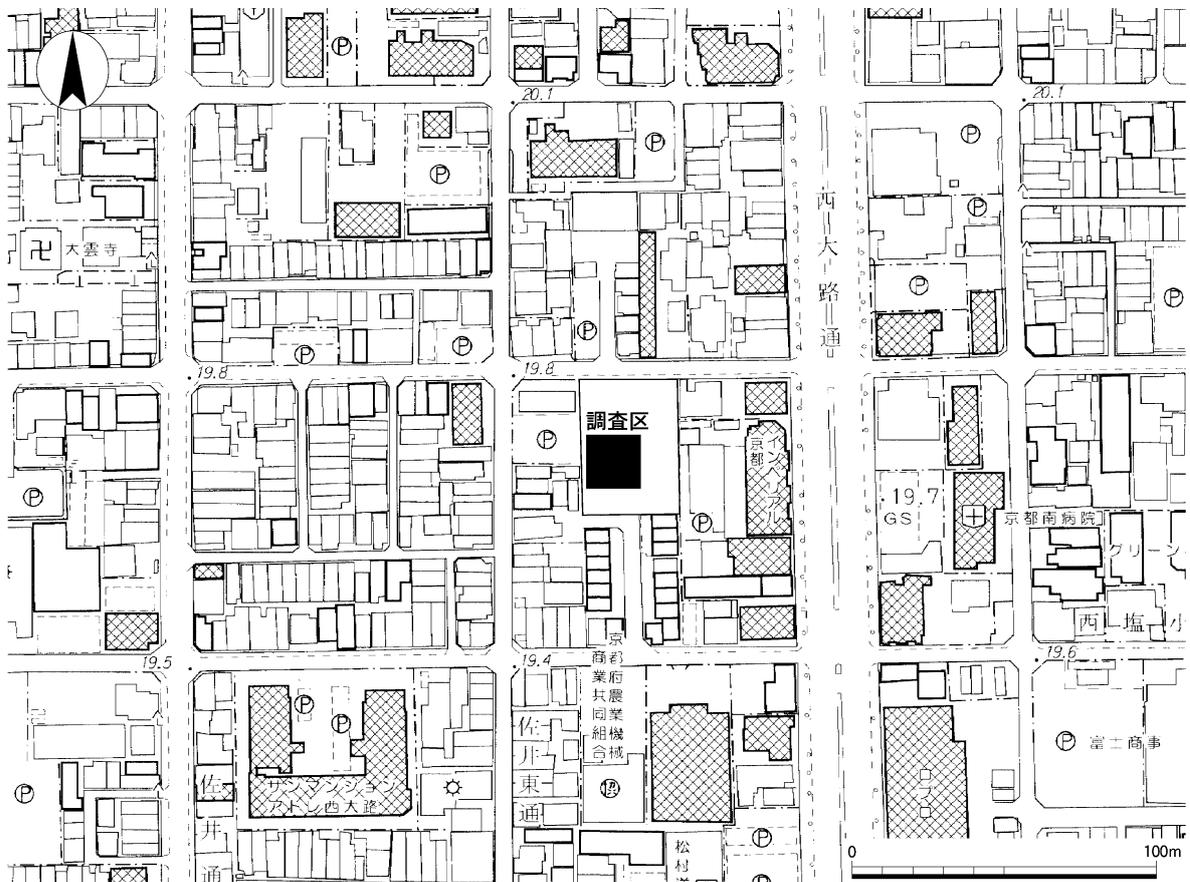


図1 調査位置図 (1:2,500)

調査を行い、10日から機械力による埋め戻し作業、機材・器材の撤去、搬出作業を経て、12日に現場を引渡し、すべての発掘調査作業を終了した。

調査の終了後、9月16日から整理作業に入り、遺構の点検、遺物の洗浄、実測などの報告書作成の準備作業を行い、報文、挿図、写真図版の作成を経て報告書を作成、この刊行をもって本調査に関わるすべての業務を完了した。

(2) 位置と環境

調査地は京都市街地の南西部で、西大路通七条交差点の南南西約200m付近に位置する。調査地の地名は七条御所ノ内北町であるが、西大路通から西高瀬川、七条通から八条通に囲まれた地区が地名では七条御所ノ内となっており、北町、中町、本町、西町、南町に分かれている。

『日本紀略』延暦22年9月9日条では、右京八条に桓武天皇の離宮、西八条院があったことが記され、十一・十二町に大納言源昇の邸宅があったとされる。『拾芥抄』西京図では、十一・十二町が故播磨守師信領、安芸守経忠伝領とされ、九・十・十五・十六町が参議修理大夫藤原忠能の領地とされる。天皇家の別業地から皇族の邸宅地として伝領され、後期に至って藤原氏へと伝えられたもので、これが御所ノ内の地名として残ったものであろうか。

調査地は右京八条二坊十・十五町と野寺小路である。十町の東側は西堀川小路が設定されている。北東300mには平安京西市があり、西堀川小路が西市の西辺を南北に延長していた。小路中央の

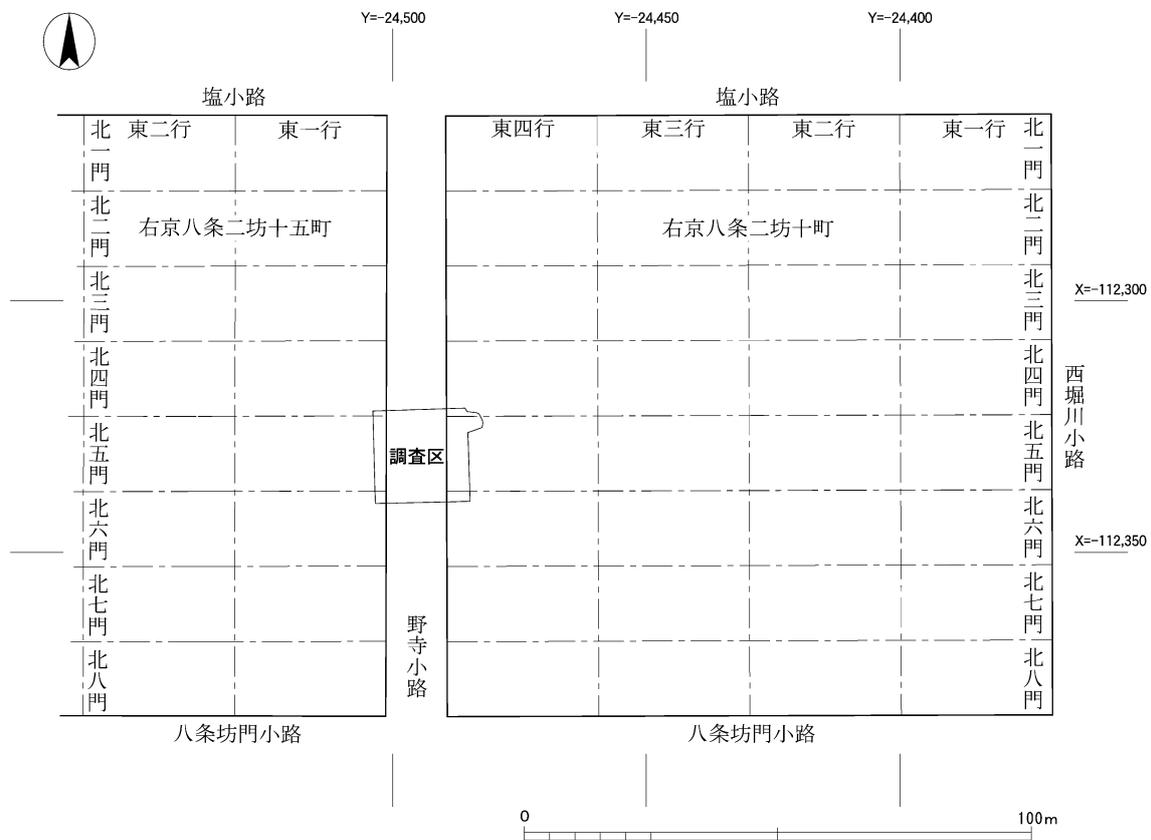


図2 四行八門地割による調査区位置図 (1 : 1,500)

西堀川は、京外から西市、平安宮に至る舟運の幹線水路として機能していた。十町も西堀川沿いにあり、市町の隣接地にあたる。

《参考文献》

- 京都市『京都の歴史1』平安の新京 (株)学芸書林 1970年
(財)古代学協会・古代学研究所『平安京提要』(株)角川書店 1994年
京都市文化市民局文化財保護課『京都市遺跡地図台帳』[第8版] 2007年

(3) 周辺の調査

周辺の調査では、調査1が昭和53年(1978)に下京区西七条南中野町8の京都南病院敷地で開催された。遺跡比定では右京八条二坊一町(西市外町)、七条大路にあたり、平安時代前期の木柵組井戸、同中期の柱穴、鎌倉時代から室町時代の柱穴、土坑、桃山時代から江戸時代の柱穴、井戸、土坑が検出されている。出土遺物には平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、瓦(軒平)、銭貨、刀子、鋤、曲物、斎串、布製品、種子などがある。

調査2は、昭和55年(1980)に下京区七条御所ノ内町71-1の西大路小学校で実施された。遺跡比定では右京八条三坊七町にあたる。調査では平安時代後期の木樋が検出された。木樋は矩形にクランクしており、何らかの障害物を避けて設置されたとみられる。出土遺物には古墳時代後期の須恵器、平安時代の土師器、須恵器、銭貨などがある。

調査3は、昭和56年(1981)に下京区西七条月読町98-1、南衣田町10-1で実施された¹⁾。遺跡比定では右京八条二坊十六町、七条大路にあたる。検出した遺構には平安時代から鎌倉時代の七条大路南側溝、路面、建物、柱穴群がある。南側溝は幅2m、深さ0.5mを測る。路面は小礫や泥土で突き固め、厚さが1m前後に達するもので、路面最上層は昭和初期のものとされる。建物は2間×2間以上の東西棟とみられる。

調査4は、昭和56年(1981)に下京区西七条中野町44で実施され

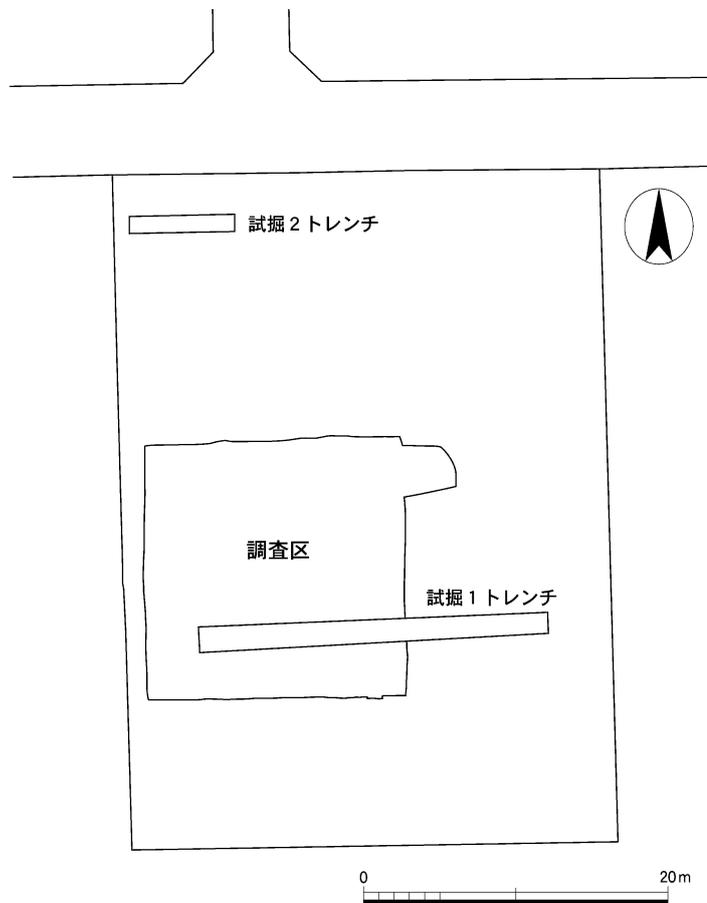


図3 調査区配置図(1:500)



図4 調査前全景（北から）



図5 作業風景（北東から）

²⁾ 京都銀行西七条支店建設に伴い約 170 m²が調査された。遺跡比定では右京八条二坊一町（西市外町）、七条大路にあたる。調査では平安時代後期から鎌倉時代の七条大路南側溝と路面、平安時代から室町時代の建物、柱穴群が検出されている。側溝は幅 1 m 前後、深さ 0.4 m を測る。路面には砂泥層の置き土があり、砂礫層が敷かれ、堅く締められる。建物は 2 間×3 間の東西棟で、七条大路にはみ出している。出土遺物には平安時代後期から室町時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、陶器、輸入陶磁器、瓦類などがある。

調査 5 は、昭和 57 年（1982）に下京区七条御所ノ内西町の西大路小学校で実施された³⁾。遺跡比定では右京八条三坊七町にあたる。調査では平安時代前期の建物、柵、井戸、溝、同後期の溝、池状遺構、土坑、鎌倉時代から室町時代の溝、土坑、集石遺構などが検出された。出土遺物には平安時代前期の土師器、須恵器、銅製丸軋のほか、同後期の土師器がある。平安時代前期の建物は 1 間以上×3 間以上の南北棟、井戸は一辺 0.8 m の縦板組横棧方形木枠井戸、溝は東西方向で幅 0.5 m、深さ 0.1 m を測る。同後期の溝は東西方向で、幅 0.8 m、深さ 0.25 m を測る。昭和 55 年（1980）調査検出の木樋遺構の東端を東に延長した位置にあたる。

調査 6 は立会調査で、昭和 57 年（1982）に西大路通七条南東地区一帯の道路で実施された⁴⁾。検出した遺構は西鞠負小路の東側溝で、出土した遺物には平安時代前期の黒色土器、緑釉陶器、土師器、須恵器、先端を切削して尖らせた橋脚の一部がある。

調査 7 は、調査 6 と同年に実施された立会調査である⁵⁾。調査地は調査 6 のさらに南側である。調査では平安時代の方形木枠井戸、江戸時代の木棺墓が検出されている。木棺の蓋板には梵字と漢字により佛名が五体の位置に書き連ねてあった。出土遺物には流れ堆積層中から弥生土器片、平安時代前期の土師器、須恵器、緑釉陶器、銭貨（神功開寶）などがある。

調査 8 は、昭和 58 年（1983）に下京区七条石井町 61 の七条小学校で実施された⁶⁾。遺跡比定では右京八条二坊二町・西市外町南接地にあたる。調査で検出した遺構には平安時代の建物、室町時代の土壇墓、井戸、平安時代以前から江戸時代まで存続した池状遺構がある。出土遺物には弥生土器、古墳時代の須恵器、平安時代前期から中期の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、土馬、土錘、小型土製品、木簡、墨書土器などがある。

調査 9 は、昭和 59 年（1984）に下京区西七条衣田町 21 で実施された⁷⁾。遺跡比定では右京八

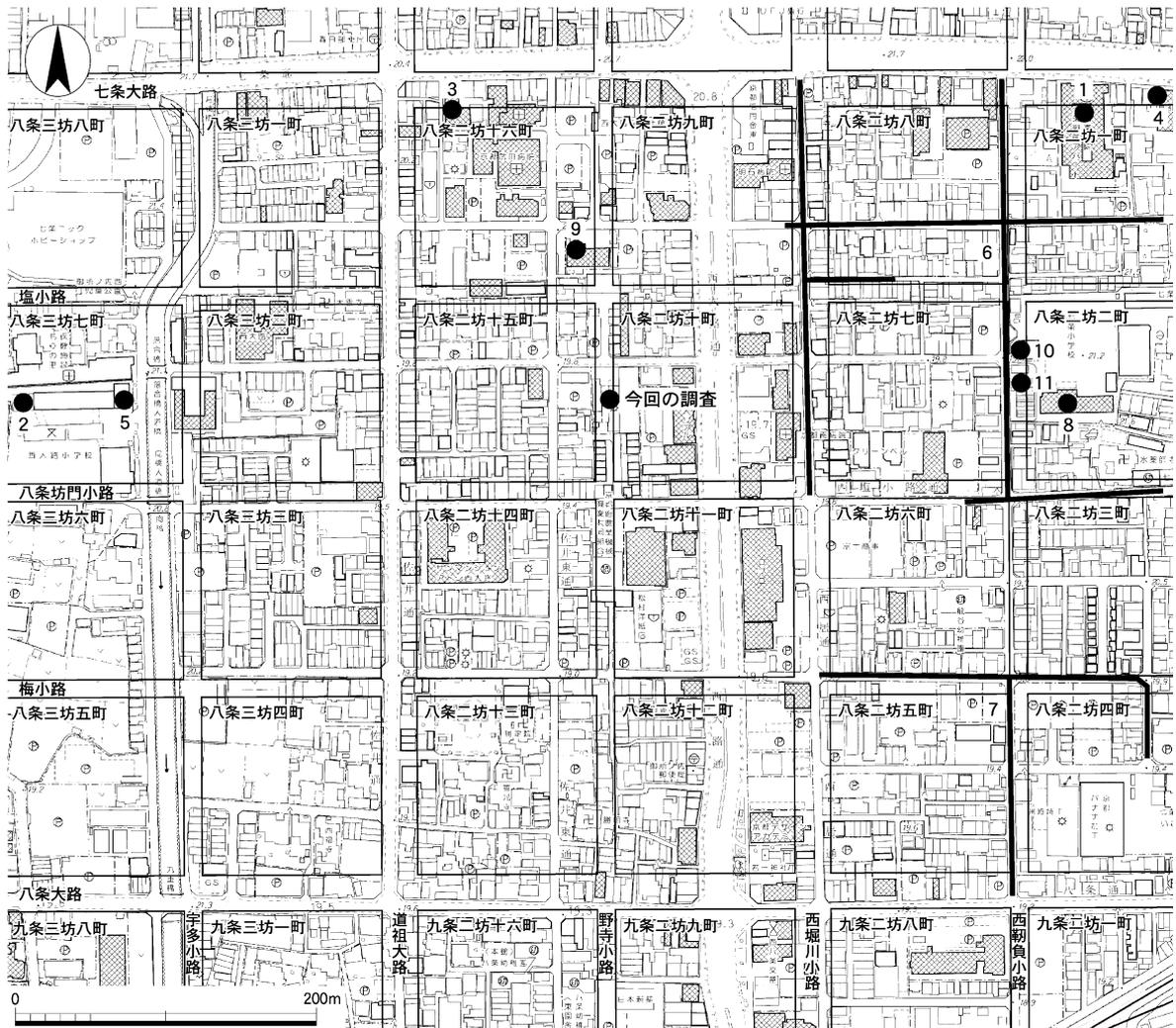


図6 周辺調査位置図 (1 : 5,000)

条二坊十六町・野寺小路にあたる。調査で検出された遺構には平安時代前期の野寺小路の西側溝、路面、犬走、宅地内溝、土坑、柱穴がある。野寺小路西側溝は、幅 1.6 m、深さ 0.3 m で、南北方向に延びる。部分的に側板が残る。宅地内溝は幅 2.6 m、深さ 0.3 m を測る。柱穴の一部には柱根が遺存する。出土遺物には平安時代前期の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器硯、墨書土器、製塩土器、銭貨（富寿神寶）、白磁などがある。

調査 10 は、昭和 60 年（1985）に下京区西七条石井町 61 の七条小学校で実施された⁸⁾。遺跡比定では右京八条二坊二町・西市外町南接地にあたる。調査で検出した遺構には平安時代前期の西鞠負小路東西側溝、路面、区画施設、鎌倉時代の溝、土坑がある。東側溝は幅 3 m 前後、深さ 0.5 m、西側溝は幅 1.8 m 前後、深さ 0.3 m 前後を測る。路面幅は約 4 m で、上面は堅く締まる。区画施設は四行八門地割による東四行北二門と北三门を区画する位置で検出した。出土遺物には平安時代前期の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、墨書土器、円面硯、転用硯、人面墨書土器、小型模造土器、土馬、土錘、銭貨（和同開珎・萬年通寶・神功開寶・隆平永寶・富壽神寶・長年大寶）、獣骨、人骨、種実などがある。

調査 11 は、平成 5 年（1993）に下京区西七条石井町の七条小学校で実施された⁹⁾。調査地は調

査9の南側にあたる。調査で検出された遺構には西鞠負小路東西側溝、区画施設、路面、建物、柵、暗渠などがある。東西側溝は部分的に護岸施設の杭と板材が残る。区画施設は3条あり、それぞれ東四行北三・四門界、北四・五門界、北五・六門界を区画する施設である。建物は2間×3間南北棟、2間×3間以上の東西棟である。出土遺物には古墳時代の庄内併行期の壺・甕・高杯、平安時代前期の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、墨書土器、土馬、土錘、人面土器、瓦類、銭貨（和同開珎・神功開寶・隆平永寶・萬年通寶・富壽神寶・承和昌寶・長年大寶）、木製品、木簡、植物種実がある。

註

- 1) 吉崎 伸「右京八条二坊」『平安京跡発掘調査概報』昭和56年度 京都市文化観光局 1982年
- 2) 前田義明「右京八条二坊(1)」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 3) 堀内明博・梅川光隆「右京八条三坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 4) 吉村正親「右京八条二坊(1)」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 5) 吉村正親「右京八条二坊(2)」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 6) 菅田 薫・本 弥八郎「右京八条二坊」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1985年
- 7) 北田栄三「右京八条二坊」『平安京跡発掘調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局 1985年
- 8) 辻 裕司・本 弥八郎・加納敬二「平安京右京八条二坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 9) 辻 裕司・近藤知子「平安京右京八条二坊」『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
弥生時代後期	オリーブ灰色粘土層、オリーブ褐色砂礫層	
平安時代前期	野寺小路側溝・路面、建物、雨落溝、柵列、柱穴、整地層(暗灰黄色砂泥)	
室町時代	耕作土層	
江戸時代	耕作土層、溝、土坑	

2. 遺 構

(1) 基本層序

調査区の西半部は旧耕作土上に直接地上げ土が盛られるが、東半部は旧建物の基礎攪乱が深く、旧耕土層が削平され、一部で地山層を掘り抜く攪乱を受けている。地上げ土による盛土は約0.7 mで、耕土層が0.2～0.3 m堆積する。耕作土層は、西半では江戸時代の単一層であるが、東半の一部には室町時代の耕作土層もみられる。野寺小路の側溝は、西側宅地の黄灰色砂泥と路面の黄灰色砂泥を切り込む形で成立する。路面と宅地側の黄灰色砂泥層は約0.1 mで、平安時代前期の遺物が少量含まれる。以下、暗灰黄色砂泥層が約0.4 m、暗灰黄色シルト層が0.3 m、灰オリーブ色シルト層が0.1 m、黄褐色砂礫層と堆積する。暗灰黄色シルト層で弥生土器片を、黄褐色砂礫層からも磨滅した弥生土器片を採取している。調査区の東半も相似した堆積を示すが、野寺小路東側溝などの成立面はやや下がり、平安時代の遺構面の東方ないしは南東方向への傾斜がみてとれる。

(2) 検出遺構

平安時代前期から中期の野寺小路の路面と両側溝、十町内で建物と溝、十五町内で柵を検出した。室町時代から江戸時代の耕作土層、溝を検出した。

調査区中央で検出した路面は、幅約4 m、検出長16 mで、東側は攪乱を受けるが、西側は良好

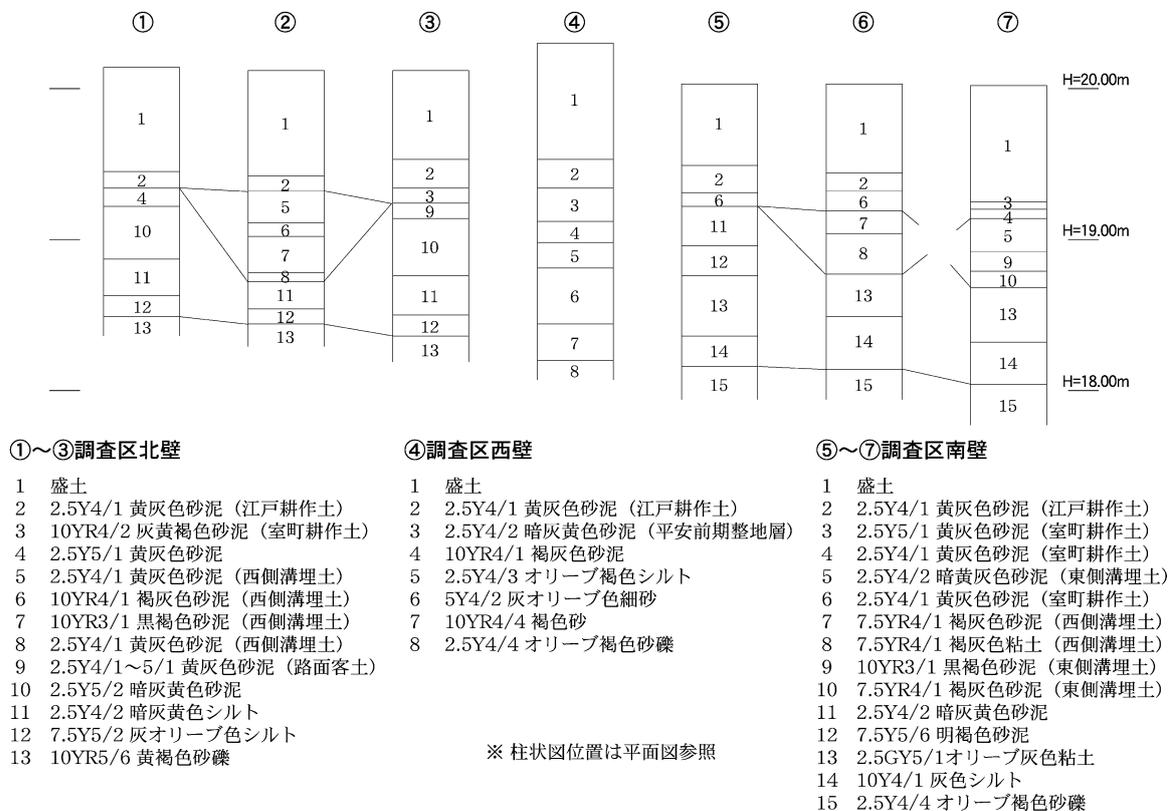


図7 基本層序図 (1 : 50)

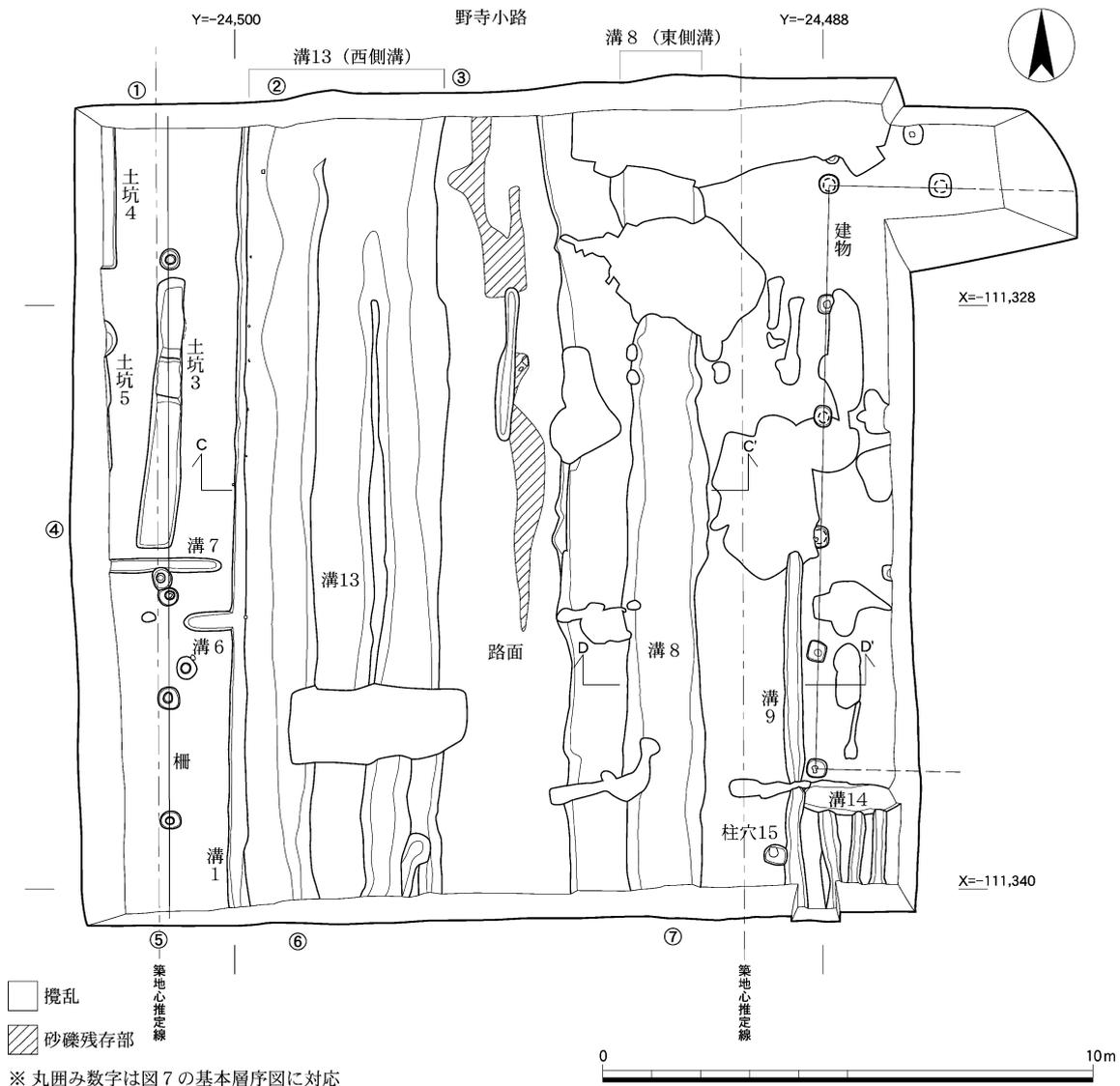
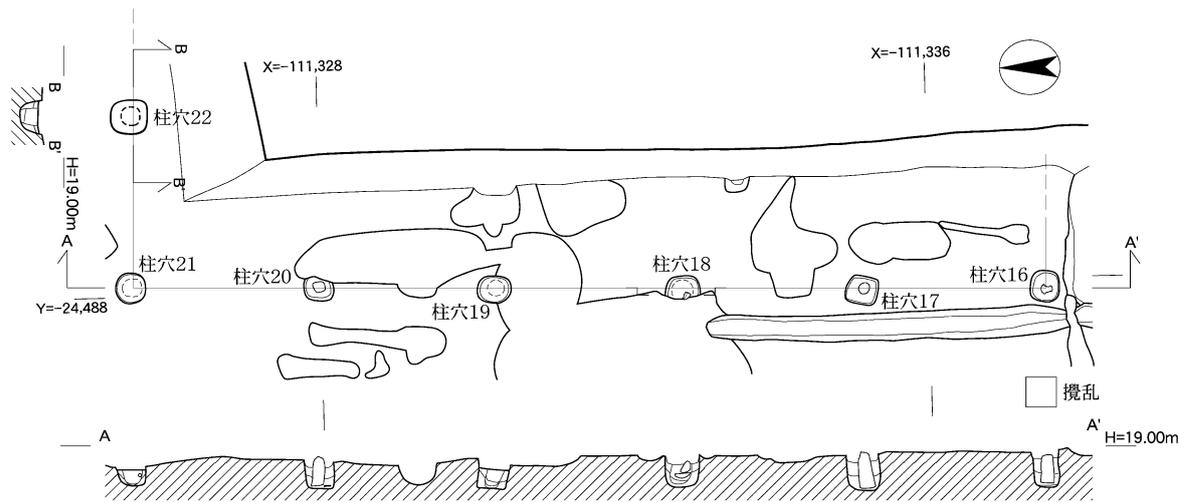


図8 遺構平面図 (1 : 150)

に遺存する。表面は客土によって堅く締められ、部分的に小礫による補修痕跡が認められる。

路面の西側で南北方向に長さ 16 m にわたって、幅約 4 m、深さ 0.5 m の溝 13 (西側溝) を検出した。溝 13 は東側 (路面側) に順次拡張された痕跡が認められる。西肩には杭が遺存する。東側で検出した溝 8 (東側溝) は、長さ 16 m にわたって、幅約 1.5 m、深さ 0.4 m を測る。上面と北側の一部を攪乱によって削平される。拡張された痕跡は認められない。

建物 (図 9、図版 1) は、南北に 5 間、東西に 1 間を検出し、東は調査区外に延びる。柱間はいずれも 2.4 m (8 尺) 等間で、柱穴掘形はいずれも円形に近い隅丸方形の平面形を呈し、一辺 0.4 m、深さ 0.5 m を測る。3 箇所 (柱穴 16・17・20) の柱穴で柱根が遺存する (図版 2)。柱穴 20 の下端部には礎板が設置され、据え付けの調整を行っている。また、この建物の西面と南面に接するように溝 9・14 を検出している。建物に伴う雨落溝の可能性が高い。溝 9 は幅 0.3 m、深さ 0.1 m で、南北方向に約 7 m 分を検出し、さらに調査区外に延長する。溝 14 は幅 0.5 m、深さ 0.1 m で、東西方向に約 2 m 分を検出し、さらに調査区外に延長する。



柱穴16	掘形上層	10YR5/1 褐灰色粘土、炭混	柱穴20	掘形上層	7.5YR4/1 褐灰色粘土
	掘形中層	10YR4/2 褐灰色粘土		掘形下層	7.5YR4/2 灰褐色粘土
	掘形下層	10YR4/1 褐灰色粘土			
柱穴17	掘形上層	7.5YR5/1 褐灰色粘土、炭混	柱穴21	柱当上層	10YR4/1 褐灰色～4/2 灰黄褐色粘土、炭混
	掘形下層	10YR4/1 褐灰色粘土		柱当下層	2.5Y4/2 暗灰黄色粘土
				掘形上層	2.5Y4/2 暗灰黄色粘土
				掘形下層	2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
柱穴18	柱当上層	10YR4/1 褐灰色粘土、炭混	柱穴22	柱当上層	2.5Y4/1 黄灰色～4/2 暗灰黄色シルト、
	柱当下層	2.5Y4/1 黄灰色粘土		2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト混、木片混	
	掘形上層	2.5Y4/2 暗灰黄色粘土、炭混		柱穴下層	2.5Y4/1 黄灰色～5Y4/1 灰色粘土、
	掘形下層	10YR5/2 灰黄褐色粘土		2.5Y4/2 暗灰黄色シルト混	
柱穴19	柱当上層	10YR5/2 灰黄褐色粘土		掘形上層	2.5Y4/1 黄灰色～4/2 暗灰黄色シルト
	柱当中層	10YR4/1 褐灰色粘土		掘形下層	5Y4/1 灰色粘土
	柱当下層	10YR4/1 褐灰色粘土、炭混			
	掘形上層	2.5Y4/2 暗灰黄色粘土			
	掘形下層	10YR5/1 褐灰色粘土、炭混			

図9 建物実測図（1：100）

柱穴15（図版2）は、建物から南西方向に約2mで検出した。周辺に関連する柱穴はない。これも柱根が遺存し、柱根自体も大型であること、宅地の西辺で、道路に近接した位置にあることから、門などの遺構の一部とみられる。

柵は、調査区西端で南北方向に検出し、柱穴4基を確認した。柱間は2.4m（8尺）で、柱穴掘形の平面形は円形に近い隅丸方形で、一辺0.4m、深さ0.1mを測る。

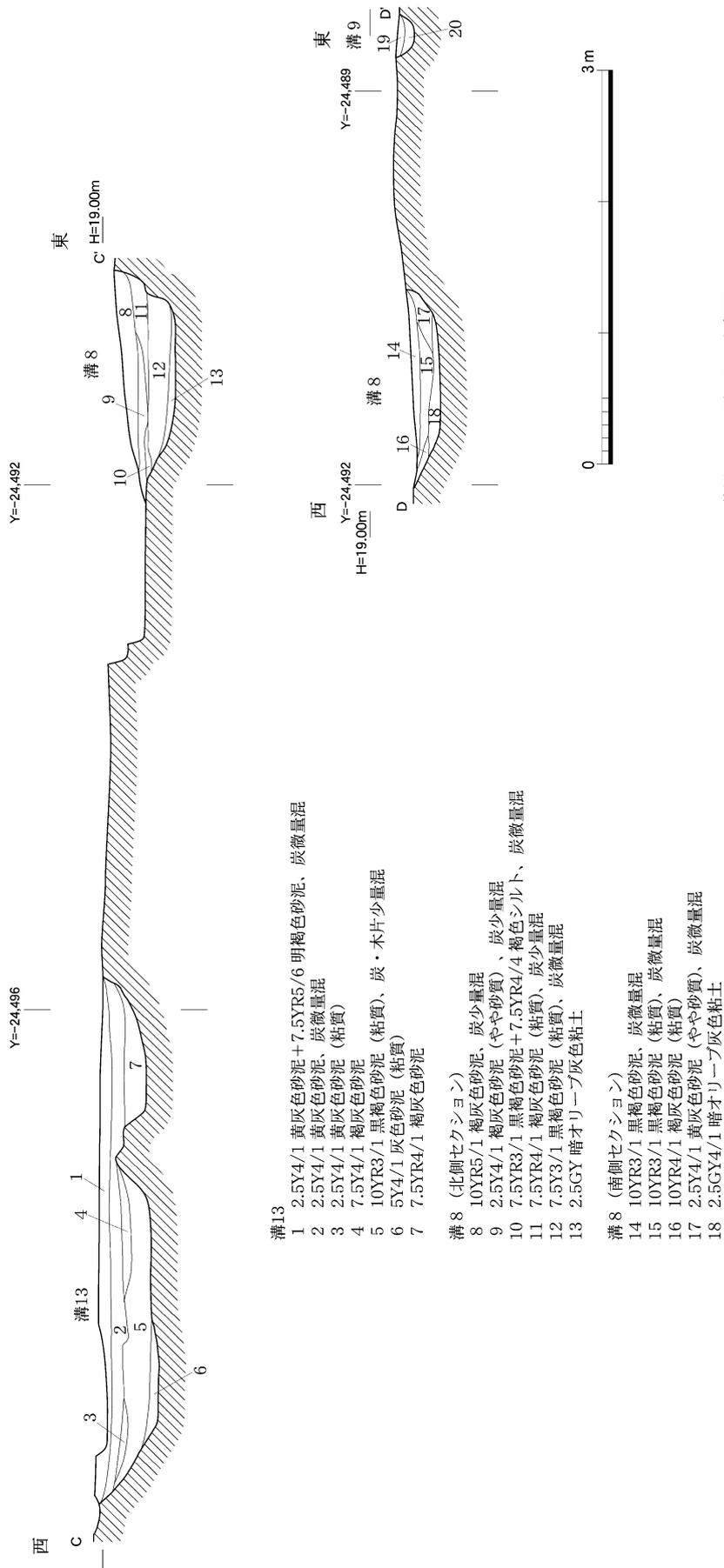
暗灰黄色砂泥層は、調査区中央西端付近、柵の西側で、野寺小路と西側宅地を分ける境界地で検出した。柵を設定するにあたって、整地されたものとみられる。

室町時代から江戸時代の遺構は、主として調査区西側で検出した。

調査区は西側から東側に緩く傾斜しており、低くなった東側に室町時代と江戸時代の耕作土が重複してみられ、高くなった西側は江戸時代の耕作土が認められる。室町時代耕作土の層厚は0.1m、江戸時代耕作土は0.15mを測る。

溝は、南北方向に2条が並行する溝1・2（未表記）、東西方向の溝6・7がある。いずれも幅0.4m、深さは0.1mで、耕作に関係した用排水路とみられる。

土坑は3基（土坑3～5）検出した。それぞれ幅0.5m、深さ0.2m、長さ5.5m、幅0.2m以上、深さ0.1m、長さ2.5m以上、幅0.2m以上、深さ0.1m、長さ3.0mを測る。埋土は耕作土と相似した均質な黄灰色砂泥層で、粘土採取土坑とみられる。



- 溝13
- 1 2.5Y4/1 黄灰色砂泥+7.5YR5/6 明褐色砂泥、炭微量混
 - 2 2.5Y4/1 黄灰色砂泥、炭微量混
 - 3 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (粘質)
 - 4 7.5Y4/1 褐灰色砂泥
 - 5 10YR3/1 黒褐色砂泥 (粘質)、炭・木片少量混
 - 6 5Y4/1 灰色砂泥 (粘質)
 - 7 7.5YR4/1 褐灰色砂泥
- 溝8 (北側セクション)
- 8 10YR5/1 褐灰色砂泥、炭少量混
 - 9 2.5Y4/1 褐灰色砂泥 (やや砂質)、炭少量混
 - 10 7.5YR3/1 黒褐色砂泥+7.5YR4/4 褐色シルト、炭微量混
 - 11 7.5YR4/1 褐灰色砂泥 (粘質)、炭少量混
 - 12 7.5Y3/1 黒褐色砂泥 (粘質)、炭微量混
 - 13 2.5GY 暗オリーブ灰色粘土
- 溝8 (南側セクション)
- 14 10YR3/1 黒褐色砂泥、炭微量混
 - 15 10YR3/1 黒褐色砂泥 (粘質)、炭微量混
 - 16 10YR4/1 褐灰色砂泥 (粘質)
 - 17 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (やや砂質)、炭微量混
 - 18 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土
- 溝9
- 19 2.5Y4/1 黄灰色砂泥
 - 20 2.5Y4/1 黄灰色粘土

図10 溝8・9・13断面図 (1:50)

3. 遺 物

(1) 遺物の概要

調査では、コンテナで8箱の土器類、4箱の木製品類が出土した。内訳は、弥生土器壺・甕、平安時代前期の土師器杯・皿、須恵器杯・壺・甕、黒色土器椀、緑釉陶器椀・皿、灰釉陶器椀・皿、輸入陶磁器水差、銭貨、瓦類（丸瓦・平瓦）、動物骨・歯牙、木製品柱根・礎板・燃え差し・木屑、植物種子（桃種実）、平安時代後期の土師器皿、室町時代の土師器皿、江戸時代の施釉陶器椀、染付磁器椀となっている。

弥生土器は、平安時代の遺構成立面以下の堆積層である粘土層や、さらに下層の砂礫層から出土したものと上層の遺構に混入して出土したものがある。

平安時代前期の遺物は、主として野寺小路東西側溝から出土したもので、建物、柵などの柱穴から出土したものは量が極めて少ない。木製品の柱根は、建物を構成する3基の柱穴と単独で検出した柱穴から出土した。

室町時代の遺物は、溝や路面の上端に堆積する耕作土層から出土した。

江戸時代の遺物は、耕作土層や耕作に伴う溝、粘土採取土坑から出土した。

(2) 出土遺物

弥生土器（図11、図版3）1～4は弥生時代後期とみられる土器で、1が壺の口縁部で、上部を二重口縁状に造り櫛描列点文を施す。2～4は甕の底部で、2は底部外面を押えて角を潰し、丸底志向が窺える。1は柱穴19、2・3は溝8、4は平安時代前期の遺構のベースになるオリー

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代後期	弥生土器		弥生土器4点		
平安時代前期	土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、輸入陶磁器、銭貨、瓦製品、木製品		土師器9点、黒色土器2点、緑釉陶器8点、灰釉陶器4点、須恵器26点、輸入陶磁器1点、銭貨1点、瓦製品1点、木製品4点		
平安時代後期	土師器		土師器1点		
室町時代	土師器		土師器1点		
江戸時代	施釉陶器、染付磁器				
合 計		13箱	62点（5箱）	0箱	8箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

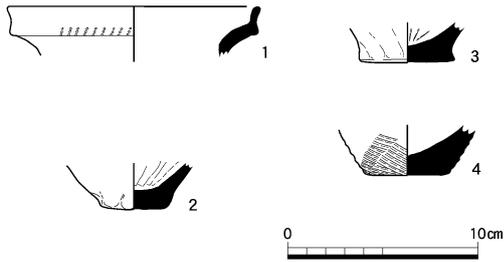


図 11 弥生土器実測図 (1 : 4)

ブ灰色粘土層から出土した。
溝 13 出土遺物 (図 12・13、図版 3～5) 最上層の堆積層を除く上、中、下の各堆積層から出土したもので、下層から出土したものが量的には多い。平安時代前期から中期初頭までの時期に収まる。5～13は土師器で、5・6が椀、7・8が高杯、9が杯蓋、10～13が甕である。5・6の椀は口縁端部を内側に小さく丸め込み、外面をヘラケズりする。7・8の高杯は脚部が遺存したもので、外面を丁寧なヘラケズリによって整形する。9は杯の蓋で、上面を丁寧なヘラミガキによって仕上げる。摘みは欠いている。10～13の甕は、いずれも口縁部を折り曲げて外反させ、端部を上方につまみ上げる。内面口縁部と外面をハケメ調整する。

14・15は黒色土器で、いずれも椀である。14は内面のみが黒色化するAタイプで、疎らな横方向のヘラミガキを施す。15は底部のみが遺存したもので、底部外面に断面三角の低い高台を貼り付ける。

16は須恵器瓶子で、底部に糸切り痕を残す。体部上半以上を欠く。

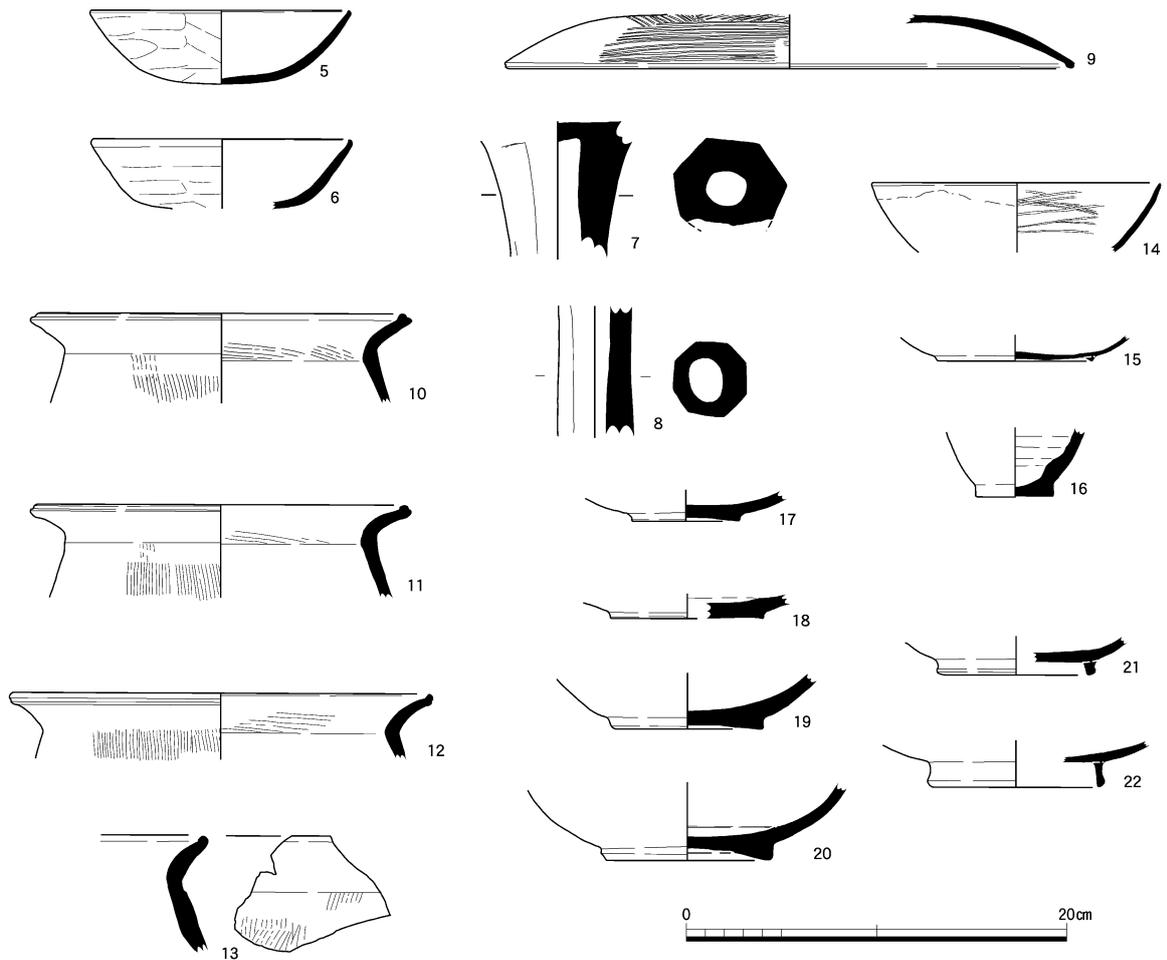


図 12 溝 13 出土遺物実測図 1 (1 : 4)

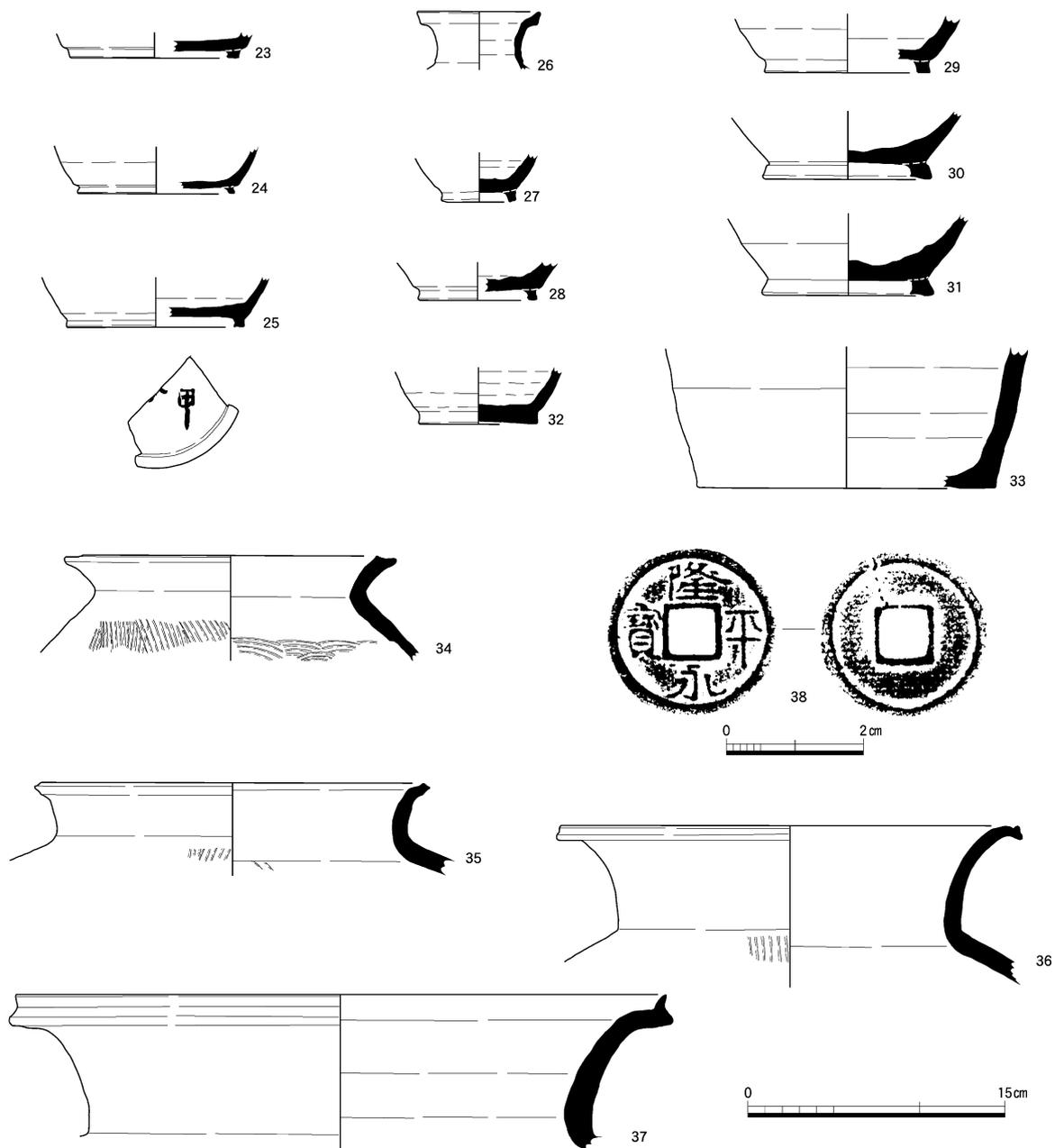


図13 溝13出土遺物実測図2（1：4、38のみ1：1）

17～20は緑釉陶器で、いずれも底部のみが遺存したものである。18は皿とみられるもので、底部は削り出しの低い高台が付く。17・19・20は椀とみられるもので、高台は削り出しで、中央部をやや深く削り込む。

21・22は灰釉陶器椀で、底部のみが遺存したものである。底部にはやや外方へ開き気味の貼り付け高台を付ける。21はやや低く、22は高い。

23～32・34～37は須恵器である。23～25は杯で、いずれも底部のみが遺存したものである。23は断面四角の低い高台が付き、24はやや外方に踏ん張る断面菱形の高台、25は断面四角の高台が貼り付けられる。25の高台内側に「□甲」の墨書がある。26～32は壺である。26は頸部から口縁部が遺存したもので、頸部は外反して上方に延び、口縁端部は肥厚して外方に面を持つ。

27～31はやや外方に踏ん張り気味の貼り付け高台を持つが、32は糸切り痕を残す削り出しの高台である。34～37は甕で、頸部および肩部以上が遺存したものである。34・35は口縁部が短く外反し、端部は斜め上方に拡張され小さな面を為す。内外にタタキ目痕を残す。36・37は頸部が外反気味に立ち上がる。口縁部は大きく外反し、端部は肥厚して外方に面を造り上方につまみ上げる。

33は灰釉陶器の壺とみられるもので、底部は平底で、内面に薄い灰釉を掛けた痕跡と底部に釉溜りが観察される。器壁は厚い。

38は銭貨で、延暦15年(796)初鑄の「隆平永寶」である。

溝8出土遺物(図14、図版4・5)39～47は須恵器で、39が椀、40が杯、41～43が蓋、44が鉢、45～47が壺とみられる。39は底部を欠く。体部・口縁部は斜め上方に延び、端部は丸く収める。40は断面四角の外方へ踏ん張る高台を貼り付ける。41～43は天井部は平坦で、口縁部を曲げ、端部をつまんで丸く収める。いずれも天井部を欠く。摘みの有無は不明である。44は底部は糸切り底、胎土は精良緻密で、器壁は薄く仕上げる。45はやや外方に開き気味の頸部を持つ長頸の壺で、体部と口縁部を欠いている。46の底部は平底で、長円の体部を持つ。頸部・口縁部を欠いている。47はやや上げ底気味の底部に断面四角の低い高台が付く。

48～50は緑釉陶器である。48は椀で、底部を欠く。体部は内湾気味に斜め上方に延び、口縁部は外反して丸く収める。49・50は底部のみが遺存したもので、49は皿、50は椀とみられる。

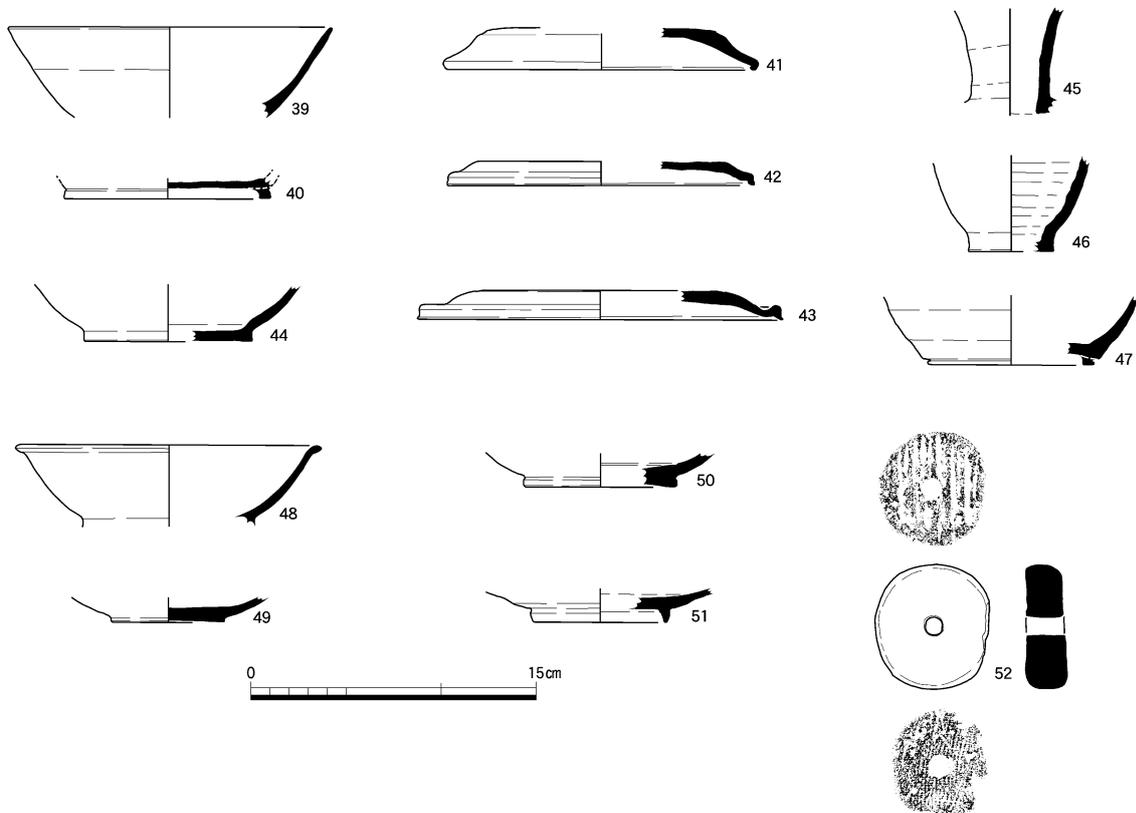


図14 溝8出土遺物実測図(1:4)

底部は削り出しの高台を持つ。

51は灰釉陶器皿で、これも底部のみが遺存したものである。内湾気味に下方に延びる小さな高台を貼り付ける。

52は瓦片を二次加工した紡錘車で、中央に貫通する小孔を穿つ。表裏にタキ目、布目を残す。

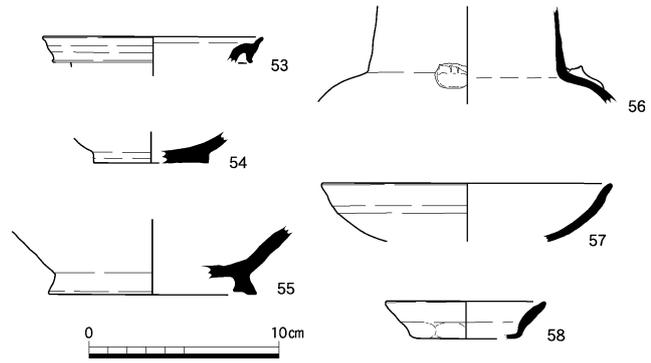


図15 暗灰黄色砂泥層・その他の出土遺物実測図(1:4)

暗灰黄色砂泥層出土遺物(図15)

53は須恵器壺で、口縁端部が遺存したものである。口縁部は外反して端部はやや下方向き上下に拡張される。

54は緑釉陶器皿で、削り出しの高台が付く。

55は須恵器壺で、底部に高台を貼り付ける。

56は輸入陶磁器で、黄釉褐彩水注とみられる。出土類例は平安京跡、平安宮西限跡、南春日町遺跡などにある。平安時代前期に属する。

その他の出土遺物(図15)57は調査区北側の溝13上面から出土した。土師器皿で、体部は内湾気味に斜め上方に延び、二段にナデて、端部は丸く収める。平安時代後期、11世紀後半代のものとみることができる。

58は調査区北側の室町時代耕作土層から出土したものである。土師器皿で、底部を欠く。体部は肥厚して斜め上方に延び、端部を小さくつまみ上げ丸く収める。室町時代、15世紀前半に属したものとみることができる。

木製品(図16、図版5)59は柱穴15の柱根で、径22.6cm、残存長59.6cmを測る。粗い面取りが施される。

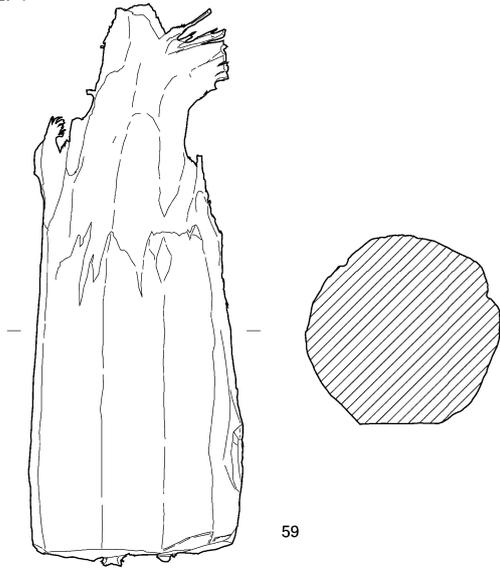
60は建物を構成する南西隅の柱穴16の柱根で、径18.5cm、残存長38.5cmを測る。同じく粗い面取りが観察できる。

61は建物西側柱の柱穴17の柱根で、径20.8cm、残存長49.2cmを測り、粗い面取りが認められる。

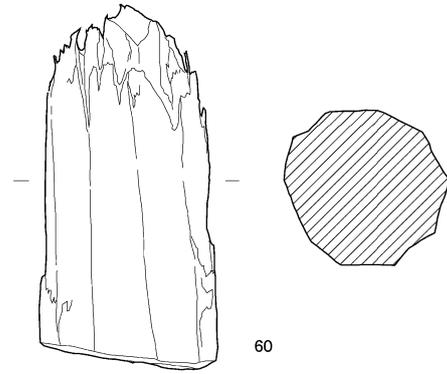
62は建物西側柱の柱穴20の柱根で、径17.7cm、残存長42.1cmを測り、粗い面取りが施される。

59～62の樹種は、いずれもヒノキである。また、柱穴20出土の礎板の樹種はスギである。

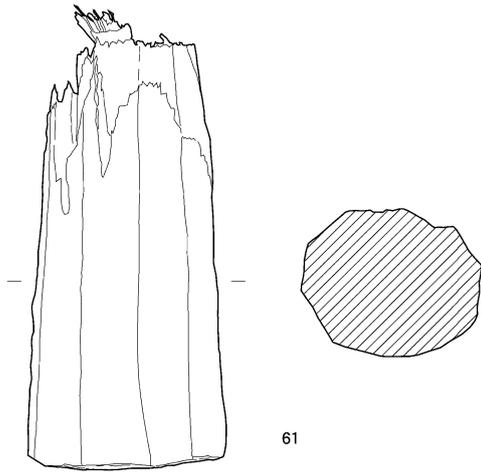
柱穴15



柱穴16



柱穴17



柱穴20

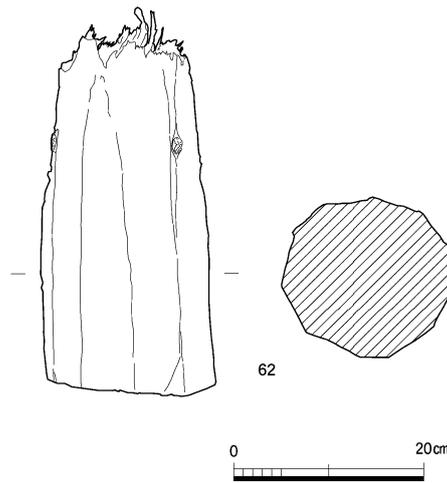


图 16 柱根实测图 (1 : 8)

4. ま と め

調査では、野寺小路の東西側溝と路面、十町内の建物、十五町と道路を画した柵を検出した。

西側溝は幅4 mを測り、溝底部に複数の流路跡がある。平時の流路と増水時の流路痕跡とみられる。溝幅が一定で直行し、蛇行していないことなど人為的な溝の拡張整備とみて間違いあるまい。拡張は西側溝に限られたもので、東側溝は広げられた形跡が認められない。

路面は暗灰黄色砂泥層の上に約0.15 mの黄灰色砂泥層を客土し、突き固めたもので、南北の通行方向に沿って小礫を入れるなどの補修痕が観察される。

調査地周辺の南北方向の水流は、物資輸送の大動脈であった西堀川に集められていたとみられるが、西堀川に近い位置に設置された野寺小路、道祖大路、宇多小路などの各側溝は、増水時に水量調節する分流機能を持たされたといえよう。野寺小路の西側溝が拡張されたのも、これに対応する目的があったとみることができる。

十町内の建物跡は、南北方向に6基の柱穴と東西方向に1基の柱穴を検出した。道路際にあり、宅地内の中心的な建物とみることはできないため、南北5間、東西2間の南北棟と復元しておきたい。

十五町と野寺小路を分ける柵は、一部で柱間が2.4 m（8尺）を測るが、柱穴自体が極めて浅く、築地塀としての復元は危ぶまれる。簡便な板塀などで代用されたものともみられよう。

弥生土器が出土した下層の堆積層は、平安の遺構が成立する粘土層やシルト層にとどまらず、さらに下層である褐色系の固く締まった砂礫層中からも出土している。褐色系の砂礫層は調査区北西部で標高18.80 mを測り、南東部で18.00 mを測る。南東方向へ下がる旧地形が復元できるが、弥生土器片の混入は、この堆積層の上限を規定している。周辺一帯の堆積関係に留意する必要があるだろう。

砂礫の上層に堆積し、平安時代遺構のベースになる暗黄灰色砂泥～シルト層の存在は、弥生時代も含めて、古墳時代、飛鳥・奈良時代にかけて湿地状態で経年したことを示唆する。平安京建都時もなお湿潤で、諸施設の設営は困難を極めた状況がみてとれよう。

表3 掲載遺物一覧表

番号	器種	器形	口径cm	器高cm	調整	胎土	色調	焼成	遺構名	時代	備考
1	弥生土器	壺	13.0	2.9	櫛描列点文	粗	10YR6/6明黄褐	良	柱穴19	弥生後期	混入
2	弥生土器	甕	底径3.5	2.45	オサエ	密	2.5Y7/1灰白	良	溝8	弥生後期	混入
3	弥生土器	甕	底径8.5	4.05	オサエ	密	10YR7/1灰白	良	溝8	弥生後期	混入
4	弥生土器	甕	底径3.6	2.65	タタキ	密	10YR5/4にぶい黄橙	良	オリーブ 灰色粘土	弥生後期	⑥-13層
5	土師器	椀	13.0	3.9	ケズリ	密	10YR7/4にぶい黄橙	良	溝13	平安前期	
6	土師器	椀	13.4	3.7	ケズリ	密	7.5YR6/4にぶい橙	良	溝13	平安前期	
7	土師器	高杯	脚柱径8.0	7.2	ケズリ	密	10YR8/2灰白	良	溝13	平安前期	
8	土師器	高杯	脚柱径4.2	6.9	ケズリ	密	2.5Y8/1灰白	良	溝13	平安前期	
9	土師器	蓋	29.5	2.85	ミガキ	密	10YR7/3にぶい黄橙	良	溝13	平安前期	
10	土師器	甕	19.0	4.8	ハケメ	粗	2.5Y6/2灰黄	良	溝13	平安前期	
11	土師器	甕	19.2	4.95	ハケメ	粗	2.5Y6/2灰黄	良	溝13	平安前期	
12	土師器	甕	21.8	3.5	ハケメ	密	2.5Y7/2灰黄	良	溝13	平安前期	
13	土師器	甕	不明	6.15	ハケメ	密	10YR6/4にぶい黄橙	軟	溝13	平安前期	
14	黒色土器	椀	15.0	3.7	ミガキ	密	5YR5/3にぶい赤褐	良	溝13	平安前期	Aタイプ
15	黒色土器	椀	底径8.0	1.4	貼付け高台	粗	7.5YR8/2灰白	軟	溝13	平安前期	Aタイプ
16	須恵器	壺	底径4.0	3.65	糸切り痕	密	N5/0灰	軟	溝13	平安前期	
17	緑釉陶器	皿	底径5.5	1.6	削出し高台	密	10Y6/1灰	良	溝13	平安前期	
18	緑釉陶器	皿	底径7.8	1.3	削出し高台	密	5Y6/1灰	良	溝13	平安前期	
19	緑釉陶器	皿	底径7.7	2.95	削出し高台	密	10Y6/2オリーブ灰	軟	溝13	平安前期	
20	緑釉陶器	皿	8.5	4.05	削出し高台	密	N7/0灰白	良	溝13	平安前期	
21	灰釉陶器	皿	底径7.4	2.1	貼付け高台	密	N7/0灰白	良	溝13	平安前期	
22	灰釉陶器	皿	8.6	2.5	貼付け高台	密	N7/0灰白	良	溝13	平安前期	
23	須恵器	杯	底径9.7	1.55	貼付け高台	密	N8/0灰白	軟	溝13	平安前期	
24	須恵器	杯	底径9.0	2.8	貼付け高台	密	N6/0灰	良	溝13	平安前期	
25	須恵器	杯	底径10.4	2.9	貼付け高台	密	N5/0灰	良	溝13	平安前期	高台内に墨書 「□甲」
26	須恵器	壺	7.0	3.4	ロクロ	密	N6/0灰	良	溝13	平安前期	
27	須恵器	壺	底径3.6	2.85	貼付け高台	密	N6/0灰	良	溝13	平安前期	
28	須恵器	壺	底径6.8	2.2	貼付け高台	密	N6/0灰	良	溝13	平安前期	
29	須恵器	壺	底径9.5	3.4	貼付け高台	粗	N6/0灰	良	溝13	平安前期	
30	須恵器	壺	底径9.8	4.0	貼付け高台	密	N5/0灰	良	溝13	平安前期	
31	須恵器	壺	底径9.4	4.8	貼付け高台	密	N5/0灰	良	溝13	平安前期	
32	須恵器	壺	底径6.8	3.35	糸切り底	密	N6/0灰	良	溝13	平安前期	
33	灰釉陶器	壺	底径17.2	8.3	ロクロ	密	N6/0灰	良	溝13	平安前期	

番号	器種	器形	口径cm	器高cm	調整	胎土	色調	焼成	遺構名	時代	備考
34	須恵器	甕	17.0	6.2	タタキ	粗	N6/0灰	良	溝13	平安前期	
35	須恵器	甕	22.2	5.4	タタキ	粗	N6/0灰	良	溝13	平安前期	
36	須恵器	壺	26.7	9.3	タタキ	粗	N6/0灰	良	溝13	平安前期	
37	須恵器	甕	38.0	8.3	ロクロ	密	N6/0灰	良	溝13	平安前期	
38	銭貨	隆平永寶	横2.4	縦2.4					溝13	平安前期	
39	須恵器	椀	15.9	4.8	ロクロ	密	N6/0灰	良	溝8	平安前期	
40	須恵器	杯	底径10.6	1.1	貼付け高台	密	N5/1灰	良	溝8	平安前期	
41	須恵器	蓋	底径16.0	2.2	ロクロ	密	5Y7/1灰白	良	溝8	平安前期	
42	須恵器	蓋	16.1	1.25	ロクロ	密	N5/0灰	良	溝8	平安前期	
43	須恵器	蓋	19.0	1.55	ロクロ	密	N5/0灰	良	溝8	平安前期	
44	須恵器	鉢	底径8.6	3.0	糸切り底	密	10Y7/1灰白	良	溝8	平安前期	
45	須恵器	壺	頸径4.1	5.7	ロクロ	密	N5/0灰	良	溝8	平安前期	
46	須恵器	壺	底径4.4	5.1	ロクロ	密	N5/0灰	良	溝8	平安前期	
47	須恵器	壺	底径8.8	3.7	貼付け高台	密	N6/0灰	良	溝8	平安前期	
48	緑釉陶器	椀	15.5	4.3	ロクロ	密	10Y7/2灰白	良	溝8	平安前期	
49	緑釉陶器	皿	5.8	1.3	削出し高台	密	10Y7/2灰白	軟	溝8	平安前期	
50	緑釉陶器	皿	底径7.8	1.8	削出し高台	密	N5/0灰	良	溝8	平安前期	
51	灰釉陶器	皿	底径6.8	1.8	貼付け高台	密	2.5Y7/1灰白	良	溝8	平安前期	
52	瓦製品	紡錘車	縦6.6	横5.9	布目痕	粗	N6/0灰	軟	溝8	平安前期	二次加工
53	須恵器	壺	11.4	1.6	ロクロ	密	5Y7/1灰白	良	暗灰黄色砂泥	平安前期	④-3層
54	緑釉陶器	皿	底径6.0	1.65	削出し高台	密	5Y7/1灰白	良	暗灰黄色砂泥	平安前期	④-3層
55	須恵器	壺	底径11.0	3.75	貼付け高台	密	5Y7/1灰白	良	暗灰黄色砂泥	平安前期	④-3層
56	輸入陶磁器	水注	頸径10.8	5.15		密	釉 2.5Y6/1にぶい黄色	良	暗灰黄色砂泥	平安前期	黄釉褐彩水注
57	土師器	皿	15.0	3.05	ナデ	密	10YR8/2灰白	良	精査中	平安後期	11世紀代
58	土師器	皿	8.2	2.0	ナデ	密	10YR8/3浅黄橙	良	精査中	室町	混入
59	木製品	柱根	径22.6	高59.6					柱穴15	平安前期	
60	木製品	柱根	径18.5	高38.5					柱穴16	平安前期	
61	木製品	柱根	径20.8	高49.2					柱穴17	平安前期	
62	木製品	柱根	径17.7	高42.1					柱穴20	平安前期	礎板あり

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうはちじょうにぼうじゅう・じゅうごちょうあと、きぬたちょういせき							
書名	平安京右京八条二坊十・十五町跡、衣田町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-8							
編著者名	平田 泰							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2008年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 はちじょうにぼうじゅう・ 八条二坊十・ じゅうごちょうあと 十五町跡 きぬたちょういせき 衣田町遺跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 しちじょうごしよのうち 七条御所ノ内 きたまち 北町63-1	26100	713	34度 59分 46秒	135度 43分 54秒	2008年8月 18日～2008 年9月12日	289m ²	共同住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 八条二坊十・ 十五町跡 衣田町遺跡	都城跡	弥生時代	包含層	弥生土器		平安時代の野寺小路の両側溝と路面を検出した。		
	散布地	平安時代	溝、路面、建物、 柵	土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器、灰釉 陶器、輸入陶磁器、銭 貨など				
		室町時代	耕作土層	土師器				
		江戸時代	土坑、耕作土層	陶器、染付磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-8
平安京右京八条二坊十・十五町跡、
衣田町遺跡

発行日 2008年11月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961